

長崎創生に向けて問いかける

「いま求められる地方の力」をテーマにした本年度の長崎大リレー講座（長崎新聞社、十八銀行共催）は、5月31日～7月23日に計6回、同大中部講堂で開かれ、地方創生について6人の識者が講演した。講演要旨を順に掲載する。

この5年間、「江戸期日本と17世紀オランダ」をテーマに思考を練り上げ、発表してきた。そこで痛感したことは、一つ一つの歴史を掘り起こし、紡ぐことで、これまで考えもしなかった発想を得られるということだ。

以前の長崎大学リレー講座でも触れたことがあるが、ピョートル大帝がオランダで学んだことがロシアの日本への関心呼び起こし、ピルグリム兄弟のオランダでの体験が徳川幕府に開国を迫る米国の

日本総合研究所理事長

寺島 実郎氏



観光戦略の再構築を

長崎大学
リレー講座

要旨

〈1〉

原点となった。歴史を丁寧に検証していくことで、17世紀オランダが現代世界をつくる基盤となったことが、初めて具体的な姿をもって、私たちの眼前に現れるのである。

私はこのような知の再構築に取り組んでいるが、17世紀のオランダを調べてみることで、思わぬ発見に何度も遭遇した。例えば、薄紙をほぐすように事実関係を丁寧に解きほぐしていくことで、沖繩と日本との位置関係もくっきりと分かるようになった。そのことが、私自身の世界観や国際認識も変え始めている。

江戸期の日本を掘り下げていくと、非常に閉鎖的な時代だと思われていた当時の日本でも、移動と交流が歴史を動かす原動力となり、地域活性化の重要な要素となったことを痛感する。別の言葉で言えば「観光」である。私は最近、「新・観光立国論―モノづくり国家を超えて―」（NHK出版）という本をまとめた。観光を戦略的に再構築すべき時期に入ったのではないかと感じている。

観光立国を目指すという力が求められる。

きにもすれば訪日観光客の数はかなり話題となる。しかし、2泊3日のバック旅行で来日し、秋葉原（東京）の安売りツアー以外は滞在中もお金をほとんど使わない旅行者がいかに増えても観光は産業にならないし、地域経済に大きなインパクトは期待できない。世界遺産もいろいろ、思い出観光だけでは持続的な地域の活性化に結び付くことは難しい。観光で地域の経済を良くしようというのであれば、購買力の高い人たちを呼び込む必要がある。つまり、情報と知的基盤を求めるハイエンド層をどのように引き付けるかが重要な鍵だ。

長崎で言えば、長崎大の熱帯感染症研究のように突出した存在が、世界中の研究者や産業人を引き付け、移動と交流を促進し、起爆剤になるのではないかと考える。「知による高付加価値化」をどう実現するか、ビッグデータの活用も含め、観光戦略の再構築